

いつでも聞こえる狂騒曲

時計屋

1 騒動は突然やってくる。しかも昨日の今日。

1 騒動は突然やってくる。しかも昨日の今日。

世間様では夏休みである。つまり、学生は宿題という対価を払って遊び放題のはずなのだ。

しかし、高校1年生真っ只中であるところの一真は、新学期が待ち遠しかった。

(せっかく変な学校に入ったんだから、早く行きたいよなー)

結局のところ暇なのである。夏休みの宿題もないし、父母は海外だし、ピアノはソ#が出ないし

。

(学校行っても人が)

いた。

少なくとも昨日は生徒がいたし、生徒がいるならおそらく教師もいるだろう。少なくとも謎のじーさんばーさんはいるようだし。

(行くか?)

一真は自問した。家でぼーっとしているよりはましである。

(そうだ。制服とか生徒手帳とか教科書とかどうするんだって冬に聞いてみよう)

決心する。と、ピアノの音に混じって何か聞こえた気がして、一真は考えている間もずっと動かしていた手を止めた。

リリリリリリ

電話の音だ。

あわてて受話器に飛びつく。

「もしもーし。This is Kazuma Hoshikawa speaking.」

『君はなに人と話すつもりかね?』

聞こえてきたのは偉そうな少年の声である。

「冬?」

『その通りだ。君は在宅だね?』

「そりゃ、家の電話に出てるんだから当たり前だろ」

『鍵を開けてもらえないだろうか』

「鍵?」

『今、まさに君の家の前にいるのだが』

一拍おいて、一真は受話器を放り出して玄関に向かった。槍を構えてドアを開ける。

「おお」

確かにいた。制服姿の冬朔夜は、大型のトランシーバーのような物をもう片方の手に持っていたアタッシュケースにしまい、目の前の一真に手を挙げた。

「やあ、星河。調子はどうだね?」

偉そうな態度がやけに似合う。彼が着ると、制服もスーツに見えてくるから不思議だ。

「昨日の今日で言われてもなあ。しかも俺は、どんなに環境が変わっても風邪ひかないぞ。よく出かけるから皆勤賞は取れないけどな」

「ふむ、それは」

「待て！ どうせバカだとか言うんだろうが、分かってるから言うな！ それに、一応数学は得意なんだぞ」

朔夜は冷静に言った。

「いや、本当にまったく風邪を引かないのであれば逆にどこか悪いのではないかと」

「……それは嫌味だな？」

「心外だ。純粹に心配しているのに」

「うわー、聞こえねー。って、なんか用があったんじゃないのかよ」

やっと思いついて、とりとめのない会話を打ち切る。

「うむ。しかし、その前にいくつか訊いてもいいかね？」

「言ってみろよ」

「さっき、ピアノを弾いていたのは君かね？」

「そうだよ」

「……」

何か言いたげな沈黙。

「何だよ！ 人の趣味に文句つけるなよ」

「文句など言っていないだろう」

「いや、そういうのを、沈黙が語ってるって言うんだぞ」

「いや、そういうのは言いがかりと言うんだ」

「口の減らない奴だなー」

「それはともかく、魔技学園には俗に言う一週間制度というのがあって」

無理やり軌道修正する朔夜。

「その“俗”って、もちろん一般人じゃなくて一般生徒のことなんだろうな。いや、気にするなよ。続けろって」

言われたとおり、朔夜は気にせず続ける。多分、相手にするとキリがないことに気がついたのだろう。少し寂しい。

「つまり、転入生には一週間以内に実態を知ってもらい、さすがにやっていけないと思った場合は拒否できるのだ」

「拒否？ 元の学校に戻れるってことか？」

「まあ、元の学校にも戻れるが、希望の学校ならどこでも」

「どこでも？」

「ああ、普通なら制限のあるようなところでも」

魔技の権力だろうか。

「それって、魔技に来てやっばや一めたって言えば、どこにでも行けるってことか？」

「最初からそれを目的にするような奴は編入の時点で撥ねられる。書類入手も大変だしな」

「編入試験なんてあってないようなものなのに」

「他の会長はもっといろいろやっているかもしれないがね。私なら、その手の話を振ってみれば

分かるよ」

「本音が聞こえるもんなあ。って、俺はそんな話聞いてないぞ」

「君のは聞こえないというに。訊いてもしかたあるまい。君は、そんな器用な性格ではないだろうと推測した。で、本題だが」

「おお、そこまでが長かったな」

誰が長くしているのか。

「とにかく、実態を知ってもらうために、実技演習をやらしてもらおうというのが今回の趣旨だ」

「あれ、それって一応科目なんじゃなかったっけか。夏休み中でもいいのかよ？」

「実技をやらないのも詐欺だしな。こういう場合には授業期間から一週間数える方が多いのだが、たまにはいいだろう」

「それは別にいいけどさ」

いつもと違うことをする理由は何か。

考えてみる。

さすがに昨日の今日では、聞いたことは多少覚えている。実技とやらは半分以上が外部からの以来だとか言っていた。そして現在夏休みである。

「要するに、夏休みで人手不足だから理由をつけて俺を働かせようとするということか」

「そうとも言うな」

悪びれた様子もない。

(まあ、こいつも仕事大変なんだろうしな)

一真は自分を納得させた。

(面白そうだし)

むしろ重要なのはそこであった。

2 肩書きがついてくる。でもむしろお得？

一真が気づいたように言った。

「そういえば、目の前にいるのにどうやって電話したんだ？ 一番近い公衆電話は確か少し先の公園のだぞ」

「その答えは簡単だ。これが電話だよ」

朔夜は先ほどのトランシーバーもどきを出して告げた。

「……どこが？」

「仕組みを言って君に理解できるのかい？」

「できるかもしれないだろ。こういうのいじるのは結構好きだぞ。壊すけど」

付け加えられた言葉に、朔夜はトランシーバーもどきを一真から遠ざけた。

「まあ、私も完全に理解しているとは言いがたいからね。そんな簡単に解明されても困るが、理解できる自信があるなら、今度専門家を紹介しよう」

なだめるように言うと、馬鹿にされていると思ったのか、一真の心は何かぶつぶつ言い出した。きっと文句でも並べ立てているに違いない。が、小さくて、内容までは聞き取れない。

(ありがたいと言うべきか)

しかし、一真の思考なら、少し付き合えば読心能力がなくとも読めそうだ。

「何か言ったか？」

馬鹿にされた気配でも感じたのか、一真が言ってくる。

「何も」

少なくとも言っていない。

「ところで、2つほど質問をいいかね？」

「何だよ？」

「その槍は？」

「うちにある武器の1つ」

1つ目の質問に、一真はあっさり答える。

朔夜は、昨日一真が警棒を持っていたことも思い出し、気にするほどのことではないと判断して、2つ目の質問に移った。

「今回の実技演習の具体的な説明に入りたいと思うんだが、君の家に上がってもいいかい？ それとも、移動しながらの方がいいかい？」

2つ目の質問に、一真は首をかしげながらも答える。

「よく知らないけど、移動する必要があるんなら、移動しながらの方がいいんじゃないのか？ 別にうちに上がったっていいけどさ」

朔夜はうなずき、行動に移す。つまり、携帯用の電話を取り、先ほどとは違う番号にかけた。

「もしもし、冬だが」

まず、名乗ると、相手は数秒の沈黙を返してきた。

「もしもし？」

重ねて促すと、やっと言葉が戻る。

『何の用だ、クソガキ社長？』

低い男の声。朔夜の知る限りでは、確か30代後半だ。

「移動するのに車がほしいのだが、今から言う場所に、5分以内に送ってもらえるかね？」

そして、返事を待たずに一真の家の住所を告げる。

『何様のつもりだてめえ』

声がさらに低くなるが、朔夜は気にしない。

「君が先ほど言ったように社長だね。少なくともこの休み中は責務を果たしているのだから、権利も行使しても構わないだろう」

言い放つと、先ほどより長い沈黙の後、ため息。

『十分以内でなら送ってやる。じゃあな』

別れの言葉とともに電話が切られる。嫌がらせとして、10分以内と言ったら10分ちょうどで来るだろう。しかし、まったく問題ない。

「……社長？」

電話中から何か言いたげにしていた一真の、予想通りの質問。

朔夜はうなづく。

「一学期に社会で、実際に会社を作って経営してみるという実習があったのだが、私の班のメンバーは私を責任者にして逃げたので、適当にやっていたら結構儲けが出たんだよ。やめるにやめられなくなって会社はそのまま存続。社長は私のまま、というわけだ。実質の社長は、さっきの電話の相手の副社長だがね」

一気に説明する。

「実際に会社作るってのはさすが魔技ってところか。それにしても、未成年が社長でいいのかよ」

「少なくとも問題は起こっていないね。しかし、呼ぶなら社長より会長の方が偉そうなので、そうしてくれ」

「会長って魔技会長だろ？ 6人？いてかぶるから、何だっけ流水？って呼ばれてるんじゃないのかよ。誰も会長なんて呼ばないんだろ？」

疑問符の多すぎる一真の言葉に、1つずつ答える。

「確かに6人だ。流水ではなく流翔だよ。6年間その名がついてくるわけだから、会長にとっては学年の名が第2の名のようなものかもしれないな」

「普通に名前と呼べばいいのに。なあ、冬？」

名前と呼ばれてふと思う。確かに、出席など以外で冬と呼ばれることは希少だ。

もちろん、転入生がいきなり流翔などと呼ぶのは不自然だが、たとえ慣れても、彼はきっと名を呼ぶだろう。他人の肩書きだけを見ることはするまい。

会って1日、心も読めず、しかし簡単に確信している自分にむしろ驚く。

「冬？」

「いや……」

何を言うべきか迷ったところで、車が到着した。

バン！

乱暴に運転席のドアが開く。

「クソガキ社長、乗りやがれ！」

その声は、電話の向こうと同じもの。

服装は夏用のスーツと標準的なサラリーマンと同じだが、髪が逆立っていたりサングラスをかけていたりと大人気ない。

(実質社長の割に暇人だな)

<まったく、予定が詰まってるのに。スターシェアリング社と芒弦社と……なんだったっけか。とにかく5つ>

副社長の心から聞こえた内容に、一瞬前に思ったことを訂正する。が、暇でないとすると、わざわざ彼が来る理由が分からない。嫌がらせだろうか。

「乗っていいんですか？ えーと……」

車内を覗き込む一真に、副社長は一転して機嫌のいい声を出した。

「ああ、オレはカザクルト。風が座って来る人だ。乗れ乗れ。社長じゃないガキは大歓迎だ」

<根性も曲がってなさそうだしな>

「それは正しい」

「そりゃどうも」

副社長の心の声に対する朔夜のコメントと、肉声に対する一真の礼がかぶった。言うと同時に、一真は車に乗り込んでしまう。

「俺は、星河一真です。かわはさんずいの方で」

のんきに自己紹介する声など聞こえる。

(警戒心が足りないんじゃないか?)

朔夜は少し呆れる。

「おーい、冬、乗らないのか？」

一真が車中から言う。

言われるまでもない。

「では、出してくれ」

朔夜も乗り込むと、あくまでも偉そうに指示を出した。

3 再会も現れる。というか、何なんだあんたら。

来人は道路交通法上よろしくない事態に追い込まれていた。運転に集中できていない。それとも、後部座席の2人組——正確にはその1人のせいだ。

「この始まりは、鳩が食堂の壁に穴を開けたことから始まる」

当の本人、自分の上司であるところの少年は、いつものように勿体ぶって言う。何を考えているのやら。

「穴は補修されたが、そこから猫が迷い込んでしまったわけだ。母猫と、子猫が五匹。四匹は保護されたが、1匹が問題でね」

(何が問題なのか言いやがれ、根性曲がりめ)

「何が問題なんだ？」

思うと同時、もう1人の少年が問う。すばらしいタイミングだ。

学生の正装であるところの制服姿の朔夜と違い、Tシャツにジーンズという格好だが、夏休みだから仕方ないだろう。むしろ、中学生らしくて好感が持てる。

「つまり、私たちよりも先に拾った人物がいて、彼女はこちらの引き取りに応じてくれないのだ」

女なのか、とも思いつつ、口に出す。

「理由は？」

「保健所の職員のふりした得体の知れない奴や、中学生を名乗る変なガキは信用できない、馬鹿にするな、と。本人の言だが」

「正しいな」

運転しながらうなずき、思う。

(いい啖阿だ)

できればそういう思い切りのいい部下がほしい。

と、前方で検問。文句をつけられないように、止まることにする。

「あー、すいませんが、この先は立ち入り禁止で」

警官がやる気のなさそうに告げる、その言葉に対して。

「すまないが、私たちはこういう者だ」

後部座席の窓を開け、何かを見せる者がいた。小さな紙製のカード。おそらくは学生証。

「……どうぞ」

いろいろと言いたいことがありそうな警官たちを残し、検問を抜けた。気持ちはよく分かる。

同情だけを後ろに置いて前を見ると、違和感がある。

「人がいない？」

「避難させた」

こちらの疑問を代弁した少年に、偉そうな社長・朔夜が簡潔に答える。やや簡潔すぎる答えだ。

「何で？」

「結界隔離法もそろそろ確立しそうなのだが、いかんせん開発中であり、範囲も限られる。結局

、現実に避難してもらおうほかなかったんだ」

「だから、何で避難する必要があるんだよ」

少年が言う。彼がいると楽でいい。自分が質問しなくてもいいから。

「挑戦されて受けて立たないのは魔技の主義に反する。だが、周りに被害を出しては魔技の理念に反する。両方を解決したわけだ。多少力技だがね。ああ、右だ。そして」

カーブを曲がると分岐があり、朔夜の指示通り細いほうの道に行く。来人は嫌な予感がしていた。

「私は彼女に言った。『検問を抜けてくるのは、私と同じ立場の者か、関係者だろうから』」

道の先を確認するより先に――正面に、大質量の光。

「『対決を望むならば、好きに攻撃しろ』と」

馬鹿社長の言葉を聞きながら急ハンドル。左側のサイドミラーが光に挟られたが、他の被害は、慣性で気分が悪くなることくらいか。

「性懲りもなく来やがったかエセ中坊！ 人のペットに文句つけるなら、誠意を見せな！！」

女性の声。予想以上に小気味いい。

来人は思いを馳せる。こういう気持ちのいい上司がほしい。

「彼女と対決、説得、あるいはその他の手段によってこの事態を収束させるのが今回の使命だよ、星河。いくらなんでも長引かせると多方面から文句が出るからね」

道路が広がったので、ハンドルを回しっぱなしで1周して元のコースに戻る。どうせ、後ろは止めるとは言まい。

正面にあるのは、アパートのような建物。階段を上った2階、1つの部屋の扉の前に女性が立っている。詳細はよく分からず、判別できるのは腰まで伸びた黒髪と、会社で見慣れたスーツ。そして、手に細長い少し曲がりくねった棒。

(棒……?)

疑問に思うと、心中の声に応えて後ろから修正が飛んだ。

「弓だよ」

「これが古代から伝わる魔除け、鳴弦の儀ってやつだ、食らっとけ！」

それを裏打ちするような、勢いのよい女の声。

彼女は構えた弓から、矢ではなく光を放った。

ビーン

ここまで、弦を弾く音がする。

迫る光にどう避けようか思案したとき、バックミラーで何かが動いた。

少年だ。善良な方の。

「とりゃあああ」

気合一閃。

進路から一瞬目を逸らして少年を見ると、窓から身を乗り出して、警棒を振り切った体勢だ。

その延長線上、生まれたばかりの光が突き進み、やや下から正面の光を殴りつけた。

カーン！

金属同士がぶつかったような、硬質の音。

一塊になった光は斜め上へと抜けていき、そのあとは何の音も響かなかったが、その方向の雲が千切れるのが見えた。

「うーん」

その快拳を成し遂げた当人は、上半身を出したまま唸りだした。

「どうした、星河」

「いや、何か引っかかっているんだけど、何だったかなあ」

「正面から受けて立つたあ大したもんだ、初顔だな？ あたしはサザナミミツレ！ 名乗りな！」

その言葉に、少年はさらに悩む。

「うーん、ミツレ、ミツレ……あ」

彼は、高速による風にも負けず、器用に手を打った。

「姉ちゃん？」

その口から漏れた、つぶやきに近い声は、しかし、全員の耳に届いた。

思考を止めた者たちに、車の左右を吹きすぎる風の音だけが取り残される。「あたしに弟はいないけど……」

少し経ってから、やや勢いの鈍った、ためらいがちな声が聞こえる。

「ああ！ もしかして、あんた、一真？」

ビィン

向こうは、手を叩く代わりに弦を弾いた。

あわててまたも急ハンドルによって光を避けながら、来人はバックミラーで確認した。朔夜も、意表を衝かれたような顔をしている。珍しい。

(これが見られただけでも、収穫にはなるかね)

そんなことを思っているうちに、車はアパートの前に着いた。

4 常識が去っていく。妥協よりも非常識。

水連はアパートの正面に現れた、招かれざる客を見下ろしていた。

1人は見たことがある。何回か来ている、老けた中学生だ。

もう1人は見たことがない。自分よりは年上だろう。『おじさん』初期といったところか。何となく苦労的な気がする。勘だが。

そして、見たことのあるようなないような少年。これが今回の問題人物である。

「あんた、ほんとに一真かい？」

「何で疑うんだよ、姉ちゃん」

そりゃあ、長いこと会っていないからである。

「……ということは、彼女は君の姉なのか？」

「ううん、従姉妹」

老けた少年の質問にあっさり答える一真(仮)。覚えがあるようなないような。

「あんた、叔父さんか叔母さんと漫才会話でもしてみなよ。そしたらきっと分かるから」

見知らぬ相手との会話では、テンポがつかみづらい。

「ええ～、俺別に、漫才なんかしたことはないよ？」

「まあ、つっこみどころは多そうだが」

不良サラリーマンのつっこみ。

「えーっと、とにかく、5年前に、姉ちゃんが大学に入るからって、伯父さんたちまとめて日本に定住しちゃったから付き合い少なくなってさ。ほとんど会ってないんだよ。俺だって、20センチ以上伸びたし。でも、星河一真だってばー」

前半は2人に対する説明、後半は自分に対する主張だろう。

「じゃあ、あたしに対してはどうなんだい？ ほら、女らしくなったとか」

言われて、一真はこちらをじっと見る。せっかくなので、腰に手を当てて見下ろしてやった。こういうのは気合が肝心だ。

「うーん、……よくわかんない」

なるほど。この馬鹿正直っぷりは一真かもしれない。

「で？」

「……って？」

言ってやると、一真らしき少年は首をかしげた。

「あんたが一真だったからって、結局どうなるんだよ」

問題はそこである。

「えーっと、何だっけ。猫？」

「猫って……あんたそれ、そこの若作りから聞いたわけ？」

「冬？ そうだよ」

「できれば、あっさり肯定して話を続けなくてくれ」

偉そうなガキは、もちろん無視することにする。

「出といいでよ、カーシャ」

『にゃ〜』

家の中から鳴き声が応え、ドアから噂の的が顔を出した。

群青色の毛並みに、金色の目。ついでに、真珠色の角が額から突き出している。

一真が、ぽかんと口を開いた。

「でか」

そう、カーシャと名乗ったこの“猫”は、少なくとも虎ほどの大きさはあった。もう少し大きいかもしれない。

「猫だって？」

振り返って疑問符を飛ばす一真。偉そうな少年は肩をすくめた。

「報告では、猫が一番近いと言っていた。まあ、大差はない」

本気で思っているのだろうか。

「とにかく、もうひとり立ちの時期だっていうし、どこにいたって文句言われる筋合いはないね」

「そうなのか？」

「母猫によると、そうらしい。が、何にせよ、こんな所にいて一般人にどうこう言われるのは立場的に困る。せめて学園の敷地内でないと」

「うーん」

一真はうなった。

「……そういや、姉ちゃん何でスーツなんだ？」

悩むのにすぐに飽き、そんなことを聞いてくる。

「何だっていいだろ、別に」

少しばつが悪くなって、水連は視線を逸らした。

「オレが思うに、だな」

不良サラリーマンが唐突に口を出した。

「スーツ着てる女ってのは大概OLか、キャリアウーマンだと思うんだが。しかし、こんな真昼間に家にいるのはおかしくないか？ 姉さんよ」

痛いところをついてくる。

「……就職活動中だよ」

声は小さめだったが、連中はしっかり聞き取ったらしい。

「あれ？ 姉ちゃん、大学卒業したんじゃないか？」

「その性格で真っ当な就職活動をしようとは奇特な」

「ああ、就活中の線もあったか」

好き勝手言われた水連は、とりあえず従兄弟にのみ返事した。

「今年卒業したよ。もちろん在学中だって、就活サボってたわけじゃないさ」

「つまり、その性格が災いして雇ってくれる所がなかったと」

「うるさいよ、エセ中坊」

文句を言うが、その声は幾分小さい。

「大体何だ、『あなたの言葉遣いは生徒に悪影響を与えます』？ あんたらの保守主義のほう
がよっぽど問題だってんだ。そのうち授業聞いてもらえなくなるぞ」

「生徒？」

聞きとがめた一真がつぶやく。

「これでも教員免許は持ってんだよ。学校だろうと会社だろうと話が通じないのは同じだけどな
」

「うーん」

またも、考え込む一真。何を考えているのやら。

「とにかく！ 愚痴を聞いてもらったって何の役にも立たないんだ、とっとと帰れ！」

叫び、威嚇に弓を構える。もちろん、出方によっては実際に撃つつもりだ。

しかし。

「なあ冬、姉ちゃん雇おうよ」

一真が言った。

(……は？)

「学校の中ならいいんだろ？」

「まあ、確かにその手はなくもないのだが……うーん」

「何がダメなんだよ」

「人事部からの文句と、彼女の意味」

老けた少年に釣られて、一真もこちらに視線を戻した。

「姉ちゃん、ダメかな？」

水連は事態を整理しようとした。

「つまり、あんたらの学校で雇ってくれようってわけ？ そんな同情なんていらないね。大体、
一生徒に決められるもんじゃないだろ」

「いや、そこは問題ではないのだが」

「冬は仕事に埋もれるくらい偉いから、きっと平気だろ」

中学生たちは気楽に言う。

「それに、同情じゃなくて、姉ちゃんみたいな先生いたら楽しいと思うけど」

「うちの学校では、個性派にも入らないだろうね。確かに、魔技の教師になろうという奇特な人
物は少ないから、人材が不足しているのは確かだが。問題は」

どうやら態度だけでなく実際にも多少は偉いらしい少年は、挑戦的にこちらを見やった。

「こんな生徒に対抗する自信があるかということくらいだろうね」

自分と、一真を示す。確かに、こんなの相手にしていたら、普通の大人は逃げ出すだろう。

「上等だね」

負けず嫌いの水連は、気がつくそう口にしていた。

「カーシャの面倒も見てくれるってのかい？」

「努力しよう」

「まあ、政治家よりは信じてやってもいいかもね」

「いいのか、姉さん？」

不良サラリーマンが言う。どうでもいいが、さっきから姉さんと呼ばれる義理はないのだが。

「なんつーか、その、わざわざ一線を越えなくてもいいと思うんだが」

「でも風座さん、世界はつながってるんだよ」

一真が言った。

「一線なんて、あってないようなもんだね」

水連も言った。

「この一族は、みんなこんな人物ばかりか」

冬というらしい少年が、ため息のようにもらす。

「何か文句があるってのかい？」

「いや、素晴らしいということだよ」

少年が、両手を上げる。その態度に、少しは勝った気分になった。

視線を上に向けると、先ほどの雲の切れ間から、日光の筋が落ちていた。

それを眺めながら、少しずつ、予感のような微かな実感が湧いてくる。

ここから、新しい世界が広がる。

きっと、明日から新しい1日が始まってくれるのだ。